

太平洋文明時代と 統一思想の使命 ——一つの比較文明論的試論——

忠北大学校教授 政治哲学

金 泰 昌

目 次

- I 序論：動機と命題
- II 現代の危機の症候と構造
 - (1) 危機のいくつかの症候
 - (2) 危機の四重構造
- III 危機の根源・病んだ西欧文明
- IV 近代西欧文明と世界文明
- V 太平洋文明時代の統一思想
- VI 結論

I 序論：動機と命題

私がこの文章を書くようになった動機は三次元的である。

第一の動機は、現実感覚の次元に関係するのである。今日の時代状況のもとで具体的に感じられる感覚が、どうしてかやりきれなく残念なのである。それではだめなのに、別にこれといった変わった方途もなく、まかりまちがえば大変なことになるのではないかという危機意識がみなぎっている。そうはいうものうまくやりさえすれば何か不思議な機会が開かれるかも知れな

いというような漠然たる期待感が漂っているのが事実である。このように「危」険を意識しながらも「機」会を期待する心理は、ある「危機」状況の症候であるにちがいないという感覚を確認してみたいのである。

第二の動機は、歴史意識的な次元に関係するのである。現実生活のなかで感じられる今日の危機状況が、偶然かつ瞬間的に発生した一時的で枝葉抹節的なものではなく、相当長くまた相当深い歴史の過程を経てかもしだされた結果とみる意識を調べてみたいのである。

そして、第三の動機は、未来展望的な次元に関係するのである。いかなる形態であれ、新しい文明が形成または創造されなければならないという要請と、それは太平洋文明圏で収斂される活力と叡智によって主導される新しい文明創造の思想と運動を通してなされるという展望を予想してみたいのである。

そのような動機をもって書かれたこの文章の目的は、次の四つの命題を敷衍するところにある。

第一の命題は、現代の世界がさまざまな部面における危機によって構成された文明の危機に処しているということである。

第二の命題は、その危機がその間圧倒的な優位を占めてきた西欧文明が、他の文明との出会いにおいて、根本的には破壊的な影響を及ぼしてきたという事実が累積した結果であるということである。

第三の命題は、西欧文明の破壊的な影響は、西欧文明による世界文明の形成を可能にする機会を準備していたが、帝国主義的な膨脹のためのエネルギーの乱用と蕩尽のために、世界文明を創造できる生命力を失ってしまったということである。

そして第四の命題は、現代の危機を克服する道は、西欧文明が準備しておいた世界文明の形成のための機会をあたため、太平洋文明圏に盛られている生命力を発掘、吸収することによって、文明の再活性化を通じた世界文明の創造を模索するところから探し求めることができるということである。

II 現代の危機の症候と構造

(1) 危機のいくつかの症候

Jacques Elull は現代を自暴自棄の時代であると規定し、その実存的な感覚を七つに整理した。¹¹

- 第一は、科学・技術の発展によるさまざまな可能性の拡大にもかかわらず、根本的には出口のない閉鎖された人間状況（世界が閉じられたという感覚）
- 第二に、生の根拠が虚偽であり、生存の意味が消失した状況に対する反抗としての非合理の爆発（非合理に積み重ねられているという感覚）
- 第三は、未来のない生を耐えるように強制された精神の葛藤と空虚の外的表出としての若さが痛ましいという感覚。
- 第四に、人間の行動や社会の営みにおいて、意図と結果の相反する逆転・歪曲・欺瞞（すべてがひっくり返った世の中で生きてゆくという感覚）
- 第五に、一切の発言と主張と陳述は結果的に反対価値の強調で終るようになる価値の倒錯（価値の混乱のために彷徨するという感覚）
- 第六に、人間の言語が意味を失い、空虚な形式に退廃してしまう言語の危機（言語が死滅したという感覚）
- 第七に、現実でないマスコミのイメージが与える仮像のなかで生活する幻想の支配（現実の真の姿を見ることのできない虚ろでもの悲しい感覚）

このような症候がどこでも普遍的に感じられる現実感覚の核心であるとすれば、まちがいに「混乱の時代」(H. G. Wells) であり「不安の時代」(W. H. Auden) であり、「葛望の時代」(Arthur Koestler) であり、「不合理の時代」(Frantz Alexander) であり、「不確定性の時代」(J. Galbraith) であり、「不連続性の時代」(P. Drucker) であると同時に、「再建の黎明期」(Karl Mannheim) でもある。それは多角的であり多元的であり多面的な症候の編みだす「危機の時代」(Pitrim Sorokin) と規定されても別に違わないだろう。

とすれば、このような病んだ症候があらわす現代の危機ははたしていかなるものであろうか？

(2) 危機の四重構造

私は、現代の世界と人類が処している危機は四重に組みこまれたものとみる。それは、人格の自己同一性がくずれてしまった人間学的な危機と、人間と自然の調和が破壊された生態学的な危機と、人間と人間との間の正しい関係の基本構造が崩れた社会学的な危機と、人間と神の真正なる関係の崩壊した神学的な危機が互いにかみあうことによってなされた合成的な性格のものである。それは人間が作り出した文明の全体に関わる危機という意味から、文明の危機といえるだろう。

人間学的な危機は、自己同一性の危機 (identity crisis) ともいえるもので、「私が誰なのかわからない」という感じが実感される状況である。それは、私 (I) と私 (me) が互いに分かれて他人となってしまう (entfremden) 自己疎外 (Selbstentfremdung) をいうのである。私の意図と行為が私において一致せず、私のことばとその意味が私においてくい違い、私の価値とやり甲斐が私によって編まれていく生によって損いこわれる現実の条件である。それは結局、人格の分裂であり自我の崩壊であり、実存の消失である。私は私ではないのである。しかし、そうだという事実を認めることを願わず、また、そのようにすることのできる能力や勇気もないのである。そこでこれを忘れてたり避けたり拒否したり無視したりする。娯楽や貧食や反抗や冷笑がそこから生ずるのである。ガツガツと裂かれた自我のかけらは、統合の原点を求められず粗雑で荒っぽい方向のない疾走をつづけるだけである。忙しくくたびれお腹がすくが、ねらいも意図もない狂奔の回転にすぎないのである。そこで思いと行動が刹那的であり表層的であり、激情的であり非合理的たらざるをえないのである。

生態学的な危機は、人間と自然の間に厳然と存在する相互依存の関係を、人間の利己的な欲求充足のための一方的な乱用と搾取のために回復させがたい程度に破壊してしまった結果として生じたものである。自然生態系の秩序は、出生と成長と成熟と消滅がすべての生命体と環境の間の相互依存の関係のもとで調和にみちてなされるのである。人間だからといってこの秩序からののがれられず、またそれをこわすことのできる資格や権利が与えられない。それは必然の世界である。しかし、間違った自然観のために、人間は自然生態系の秩序とは無関係に独自の生存様式を展開してゆけると錯覚し、人間の目的と利益のみを基準とする自然の乱用と搾取が継続された。ある程度の間は自然のもった復元力のために、人間のしでかした横暴が深刻で

はなかったが、継続して加速的に破壊と毀損が積み重なったとき、ついに大自然の復讐が恐ろしく現われた。水と空気の汚染や環境破壊や公害病や異常気候等々が、今後起こるべき黙示録的な災難を予告してくれているのである。今はさほど恐ろしい悲劇の初期症状にすぎないが、そのまま継続されれば想像できないほど悲惨な終末論的な破局に陥るようになるにちがいない。

社会学的危機は、人間と人間との間の正しい関係の基本構造が崩れた結果として生じたものである。現代社会が組織化され、組織の原理が能率の論理によって作動するために人間の人格的な統合性が無視され、人間の徹底した部品化がなされる。組織の原理は、経済的な合理性による計算と評価を重視せざるをえないために、機械の機能が人間の活動を凌駕するようになり、機械と機械が形成する機械連関の論理と運営が、人間のねらいとやり甲斐よりも優位を占めるようになる。そこで人間と人間との間の関係は、人間と機械または機械連関との関係のもとで圧倒され、機械と機械がおりなす組織のなかで、呼吸と対話を失った孤立化、原子化、歯車化されてしまうのである。人間と人間との間の関係は、手続きと順序と様式と規定によってバラバラに分かれるため、人格と人格の出会いにおいてのみ感じられる息づかいや暖かさが無い。それは役割と地位と必要と利害が相衝する不安で冷やかな接触だけである。そのためにすべての社会的な関係の基本構造は、組織と機械の枠に閉じこめられた人間たちの間の葛藤と対立と紛争と闘いを解消し、調整し解決し、終結させるところから現われて整えられた「分立の原理」によって維持される。それは調和と和合と協同と和解をなし、もたらし、努力し模索するところから求められ、整えられる「統合の原理」が別にこれといった役割をはたしえないところである。そこですべてが開かれているようでありながらも実はしっかりと閉じられており、生き生きとした現実が操作された幻想によって隠され、生の根拠が虚偽となり、生存の意味が感じられないのである。

人間はしきりに増えてゆき、しかも出生から死亡にいたるまでいつでもどこであれ、人間の間にはさまれて生きざるをえないが、人間はゆけばゆくほど孤独でものさびしいだけである。「人間」という漢字が語るように、人間は本質的に人と人の「間」においてのみ人となりうる存在である。ドイツ語にも、《Zwischenmenschlichkeit》ということばがある。人と人の「間」に人たりうるものがあるということを暗示する単語である。ところが、人と人の「間」が間違えられることは、人が人らしい位置を失ってしまう地位の危機であり、適当な務めを失ってしまう役割の危機であり、したがって、ありのままのつり合いがバラバラになる構造の危機たらざるを

えないが、それらはすべてがほかでもない、社会学的な危機をつくりだす要因である。

最後に、神学的な危機は、人間と神の真なる関係が崩壊したところに現われる精神的な不毛性と実存的な虚無性と生命の無意味性の合成的な病理症状である。神のいるところに人間と宇宙の窮極的な意味の根拠があったし、神のいるところに精神的な志向のための目標が設定されたし、神こそすべての存在と価値を鼓舞してくれる大梁であった。神はいわば生存と思想の求心点であった。人間と世界の原点であった。

ところで、神を失った場所では根拠がこわされ求心点がなくなり、中心がふっ飛んでしまった。精神は実を結ばないようになり、実存はカラッポになったし、生命はとるにたりないものになってしまった。彷徨する人間や無目標社会や生命を軽視するイデオロギーが現代を代弁していないだろうか？

価値が転倒し、意味が歪曲し、希望と未来がなくなったということは、人間と神の間の真の関係が崩壊したために、人間がもつことのできた高い次元が縮小されてしまった結果である。価値基準が人間に移されるようになれば、相対的たらざるをえない人間によって価値が徹底して相対化されざるをえない。すべての価値の基準は、人間の利己的な打算と必要のために思い通りに操作されざるをえず、人間の便宜によって技術的合理的に転倒するものを防ぐことはできない。すべての基準が相対化されれば、意味の幅が拡大されすぎ、ついに事情によっていくらかでも歪曲される言語の横暴を防止できるメカニズムがないようになる。人間の実存のなかにもられている超越的な次元が、神の喪失とともになくなってしまうために、現実の一次元性の内に閉じ込められ、未来やそこにかかる希望が力を失わざるをえない。そして何よりも、人間と神の真なる関係が崩壊されれば、そこに根拠をおいた人間と人間との間の関係や人間と自然との間の関係や、人間の自己同一性がすべてその姿を失うようになることが重要だと認識されなければならない危機の相互関連性である。結局、現代は神を失うことによってすべてを失うことである。神学的な危機は、他のすべての危機の根拠となる根源的な危機である。そして神学的な危機にもとづいて生ずるようになった社会学的な危機や生態学的な危機や人間学的な危機はすべて、現代文明自体が全体的にかかっている深刻な疾病の症候として、ほかでもない現代文明の危機を物語っているものとみななければならないだろう。

III 危機の根源：病んだ西欧文明

現代の危機は、偶然に発生した一時的な現象やいくつかの地域でみられる局地的事件ではない。それは今日の我々が、いつでも実感できる普遍的な時代状況である。そしてそれは世界史の進展のなかでなされた西欧文明と他のさまざまな文明との出会いの性格と様式がもたらした累積的な結果である。そのような脈絡から Barraclough は、現代史の最も大きな特徴は西欧の非西欧に対する衝撃と西欧に対する非西欧の反抗にある¹⁸とみだし、その衝撃というのは、かつて西欧社会を根本的に変革せしめた科学と産業の結果であるが、それが非西欧社会のなかではいっそう加速化された速度で、分裂的でありながらも創造的な影響を及ぼしはじめたと解釈した。¹⁹しかもその反抗は、十九世紀の四半世紀に絶頂に達した帝国主義に対する反抗であった²⁰と明らかにしたことがある。

Toynbee は他の文明と出会うようになった西欧をとくに近代西欧と規定し、それが非西欧世界において現在までは全体として破壊力として作用したし、今日では各文明の中核部までも崩壊せしめていると力説した。²¹そして彼は、このように西欧文明がそれ自体の有機的な統一性を保存したまま非西欧文明のなかに受容されえず、しかたなく全体から離れていった断片や破片として浸透されざるをえなかったためであり、一つの有機的な統一性のなかでの足場となすべき務めを失うようになった破片は、他の文明のなかではいろいろな毒素をふき出す病理的な機能を遂行せざるをえないようになるためなのである。²²

西欧文明が他の文明に出会うようになったとき、大部分の場合においてそうであるように、他の文明の頑強な拒否と反抗が出来るのは西欧文明の有機的な統一性のなかで最も価値が低く、最も低い次元のものだけだったというところに、その衝撃が破壊的かつ分裂的に作用するようになった原因をさがしてみることができるのである。²³そして、いったん他の文明のなかに浸透した文明の破片は、あたかも本来の自己完結性を復元しようとするかのように、他の破片を呼びいれることによって他の文明の有機的な統一性を病むようにするガン細胞的な拡充を展開するようになり、ついにはその文明の崩壊までももたらすのである。

とすれば、西欧文明が他の文明に出会う以前や出会わなかったときは、創造的な機能を遂行したし、他の文明に出会ってその中に浸透して入ってゆくときも、他の文明のかわで拒否と反抗の厚い障壁を積まず、有機的な統一性としての文明全体を受けいれたとすれば、やはり創造

的な機能を遂行したのであらうとみなしなければならない。ところがそのように見れば、西欧文明の自己中心主義のおとしあなに陥るようになり、それは西欧文明を含めた諸文明を客観的に比較・分析する比較文明論の立場につりあわないようになる。そのような視覚は、他の文明の有機的な統一性としての意味と価値を無視するものであり、とりわけ西欧文明の帝国主義的な膨張に対して、自己の文明を守護しようとした拒否と反抗をもっぱら否定的にのみ評価するようにならざるをえない。それは過去の誤った歴史解釈の典型的な事例であっただけでなく、そこからもたらされた事実と価値の歪曲を正すための正しい世界認識をさえぎる障害要因でもある。世界文明を指向する広く正しい土台を準備するために、一方に片よらない眼識をそなえて歴史を再照明したという Toynbee でさえも、いまだにすっかり洗われていない種族中心偏向 (ethnocentrism) の滓 (カス) が残っていたのである。

とすれば、西欧文明の破壊的な衝撃はいかに解釈されるのか？ それは非西欧世界に浸透して入った西欧文明は、とくに「近代」西欧文明という近代の歴史性とともに関西文明が近代に入ってきて経らざるをえなかった自己分裂の破壊性を認識しなければならないだろう。たとえば、古代から中世をへて近代に至るまで連綿と受けつがれてきた西欧文明は、明らかに有機的な統一性を保存したまま創造的な機能を遂行するエネルギーを保管していたとみることが出来る。しかし近代に入るや、西欧文明は人間の発見を追求するなかで神を喪失したし、理性 (= 知性) を強調しすぎるあまり感性と意志の萎縮をもたらしたし、組織の原理と能率の論理を追求するために人間の原理と心情の論理をおろそかにしたし、神からの解放をかり取る歷程のなかで自我崇拜の奴隷にならざるをえなかったし、自然を征服する過程で生存の根拠を破壊する愚かさをあらわすようになった。このような西欧文明の病理現象は他の文明のなかに浸透して毒気をふき出す破片としてではなくて、非西欧文明の側からの拒否や反抗がある以前の西欧文明自体のなかに表われた症候であった。西欧文明は他の文明に出会って拒否と反抗にぶつかり、破片となる以前に自体の有機的な統一性を失ってしまい、解体と分裂のために呻吟していたのであり、文明の原点を喪失することによって破裂せざるをえない危機に処していたのである。そこで十九世紀の西欧の世界侵略は、原点収斂の統合力を喪失した西欧文明の核分裂による破壊力の世界的な拡散であったと見るのが、巨視的な比較文明論の視覚から、より適合した解釈のようである。近代西欧文明がすでにかかえていた文明崩壊の疾病を帝国主義的な膨張を通して世界に拡大させたと見るのである。今日の世界が人種と言語と生活様式の多様性にもかかわら

ず本質的にはまったく同じ危機に処しているのは、世界の支配的な位置をしめた近代西欧文明が病んだし、病んだ近代西欧文明の圧倒的な優位が世界を病むようにするのに決定的な役割を可能にしたとみるのである。それは部分的にかつ局地的に遂行した近代西欧文明の創造的な役割をすべて相殺しても大きく残る近代西欧文明の世界的な役割の否定的な側面である。そして他の文明が拒否と反抗の障壁を積み重ねなかったとすれば、今日の危機のなかで生存と発展のための生命力を非常に枯渇させてしまったが、拒否と反抗を通して守護し維持した程度の自己文明のエネルギーが残っているようになったとみななければならないだろう。

IV 近代西欧文明と世界文明

たとえ病んだ形態であれ世界を一つにしたのは近代西欧文明である。過去のいくつかの文明がその当時の世界を一つにした場合（たとえば、ローマ帝国や漢帝国の文明）があったが、今日の地理学的な眼識からみるときは、局地的なものにすぎない。しかし、本当に全地球的な規模でみた世界を一つにするのに貢献した近代西欧文明は、将来の世界文明を考え述べるにあたっての基本的な概念と準拠の枠を用意してくれたとみることができる。ある意味では文明の危機に処している現代の世界という形態で世界を一つにしておいた近代西欧文明は、将来現われる世界文明の誕生のために、「立而不居」の偉大な役割をはたしたといわなければならないかもしれない。なぜなら、危機は危険を意識することによって機会を模索するようにしてくれる限界状況であるために、不可避的に新しい道を探し求めるようにする意志と行動を発動させる強力な動機を提供するのに、それが近代西欧文明によって準備されたからである。変りない状況で一つの世界がなされたとすれば、世界文明は徹底した西欧化のもとで造られるようになっただろうし、そのようにつくられた世界文明は、西欧文明の単なる拡大再生産にすぎなくなっただろう。とすれば、西欧中心の世界文明は形成されたかどうかかわからないが、真の意味での世界文明の形成は不可能になるのである。圧倒的な優位を利用して、ほとんど強制的に世界を一つにしておいた近代西欧文明がついに危機に処した世界をもたらしたのは、その危機を克服する過程を通して、名実ともに相符合した世界文明を創造する新しい歴史がへなければならぬ出生の陣痛であると解釈しなければならないだろう。

ここで我々がはっきりしておかなければならないことは、西欧文明が近代に入る以前にもっ

ていた有機的な統一性によって遂行することのできた創造的な機能とその基本的な構造が新しい世界文明を描いてみるのに、非常に大きな助けになるという点である。それは直接的であれ間接的であれ世界文明の母体となるだろうし、またいわば病まず健康な文明の姿がどうでなければならないのかを暗示してくれるからである。

方向を失わない発展と収斂によって調整される拡散と中心を失わない統合が、文明の基底とならなければならない。それはどのような文明も存続と繁栄とのために必要とする基本条件である。それは過去の長い歴史がもの語る文明の生命原理であり、それにさからうときその文明は衰退したり滅亡するようになる。西欧文明は本来、非常に力動的かつ創造的な生命力を豊富にもち、燦爛たる役割を歴史の舞台の上で遂行したが、文明の生命原理を軽率に考えて過大な無理を敢行することによって結果的にそれがひろまってゆく拡散の遠心力を収斂させられず、それがなしておいた発展の推進力を方向づけられず、それが開かれた機能の分散化を統合させられないために、新しい挑戦に対応できないようになった。もちろんアメリカとソ連の国際政治・軍事的優位という形態で近代西欧文明の役割がある程度の間延長されるだろう。しかしそれはすでに近代西欧文明の基点が水平移動されることによって、新しい歴史の展開が西欧文明の軌跡の外でなされることを予示してくれる事態の進展だけである。近代西欧文明の世界への拡張は、西欧文明の自体崩壊をもたらしたし、新しい世界文明を形成しなければならない歴史の要請は、西欧文明の原点回帰を必要にした。西欧文明の原点回帰は、単なる「西欧の没落」(Oswald Spengler) や「西欧の矮小化」(Geoffrey Barraclough) にまつわった悲観論とは異なるのである。それは適当な役割をはたすことのできる基本的な健康を求めるための自己調整という積極的な意味が内包されている概念である。近代西欧文明が担当した役割の副作用を調べて建設的に機能転換を敢行するのである。世界文明のころあいを準備するまでにはいたったが、世界文明をつくり整えるのに必要なエネルギーがないことを認識し、ふたたび本来の位置にもどってゆくのである。そのようにすれば、西欧文明の創造的な機能が再生されうるのであり、他の文明が指導する世界文明の創造にさらに大きな寄与をはたすことができるようになるだろう。

V 太平洋文明時代の統一思想

かつて歴史の中心が西欧から太平洋に移るということを予見した人は少なからずいた。たとえば Lincoln 大統領のもとで國務長官をした William H. Seaward は、太平洋こそ将来の世界史を左右するようになる運命の大洋 (an ocean of destiny) であると主張したし、ロシアの天才的な亡命家であった Alexander Herzen は、太平洋を「未来の地中海」と呼んだ。⁹¹ Albert J. Beveridge 上院議員は「太平洋を支配する勢力が世界を支配する勢力」⁹²であるといったかといえ、Roosevelt 大統領はその歴史観を次のように披瀝したことがあった。

「地中海の時代はアメリカ大陸の発見とともに終わった。大西洋の時代は今その発展の絶頂にある。ところがまちがいなくすぐにその手中にある資源をすっかり消費し尽くしてしまうだろう。すべての時代のなかで最も偉大な時代となる運命をもって生まれた太平洋の時代は今やまさにその黎明期にある」⁹³

ここで将来の世界文明が太平洋文明という形態で形成されると考える理由を三つだけあげよう。

第一の理由は、太平洋はたとえば地中海や大西洋とちがって、特定の文明の単独舞台でなく、西欧文明と非西欧文明がともに協力しながら、世界文明の創造にまったく同様に参与するのにふさわしい位置にあるという点である。

第二の理由は、太平洋沿岸にいる民族間の関係の力動性とその規模において、その影響力において他のどの地域よりも大きく加速的にさらに大きくなるという展望である。

そして第三の理由は、文明西進の歴史的趨勢を見るとき疎外の文明の重心が太平洋側に移されてゆかなければならない段階にきたとみる判断である。

そういうわけで世界文明の創造を主導する叡知と活力が太平洋文明圏から現われてくると確信し、またそういう意味で、世界文明が整えられる次の時代は太平洋文明時代となるだろうというのである。

このように、太平洋文明時代を迎える場合に、それを主導する叡知と活力の源泉として統一思想が負わなければならない意義が非常に重要である。それは崩壊した人間と神の関係を真に再定立させうる新しい神学と、間違った人間と人間の関係の基本構造を正しく再設定することのできる社会学と、破壊された人間と自然の関係を再調整することのできる生態学と、こわれ

た人格の自己同一性を再確認することのできる人間学が、有機的に統合された思想体系をもって整えられて、現代文明の危機を克服し、世界文明をうちたてるのに建設的に寄与できる能力と、創造的に参与しなければならない責任をはたすことのできる思想的な基礎とならなければならない。

このような脈絡から、統一思想がはたさなければならないいくつかの具体的な使命を考えてみたい。

第一は、統一思想に立脚した教育論は、太平洋文明時代の主役を養成する使命をはたさなければならない。ここでいう主役とは、心情教育を通して知性と感情と意志がバランスよく配合されることによって、人格の統合性をそなえるようにし、規範教育を通して正しい人間関係をもつことのできる善良な資質を具備するようにし、天才教育を通して、豊かな創造性を養う方向に発揮できる能力の開発された人間として構成されるのである。そのような人たちを多く輩出したことによって、彼らが世界文明を整えてゆく太平洋文明時代の主役になるようにしなければならない。

第二は、統一思想に立脚した社会哲学は、太平洋文明時代の指向する未来社会の基本構想を提示しなければならない。それは端的にいえば、真の価値が実現される真実の社会と善の価値が実現される倫理の社会と美の価値が実現される芸術的な社会が、すべてともになされるところに実現される。そしてそれが世界文明を整えてゆく太平洋文明時代の社会学の基本的なパラダイムとならなければならないのである。

第三は、統一思想の巨視的な眼識を通して、太平洋文明圏で発生・発展したいろいろな思想や理念の適当な位置と役割を確認することによって、世界文明を整えてゆく太平洋文明時代に創造的に貢献するようにつくらなければならない。正しい人間と神の関係を設定する健全な神学の基盤の上で、人間と人間との間の関係を重視する儒教の理念や、人間と自然との関係に対する仏教と老荘の思想がどのような意味と関連をもつことができるのかを調べて、その教えや思想の価値を生かせば、世界文明のための多彩な質料とみなすことができるだろう。近代西欧文明の浸透を受ける以前の太平洋文明圏のいくつかの文明の思想や理念は、そのとき、そのところでそれなりの役割と機能をはたしたし、そのような意味で非常に大きな価値と意味があった。しかし、統合された体系のエネルギーを基礎として世界文明を創造するのに貢献することを指向する意志とそれを実現するための機会が与えられないまま 長い停滞に陥ってしまった。統

一思想は時代の要請とみずからのもつ包容力をもって、そのような思想と理念のなかにもられている叡知と活力を発掘・開発して、太平洋文明時代の歴史発展に創造的に参与することができる位置と方向を提示してあげなければならないと考えるためである。

第四は、統一思想の均衡のとれた統合的な視覚を通して、西欧文明の役割と機能を正当に評価・判断する使命がある。将来うちたてられる世界文明のころあいはどこまでも西欧文明がなしておいたという歴史の認識をはっきりとさせ、西欧文明の近代性をもたらした屈折と偏向から生じた危機を克服するなかで、西欧文明と他の文明の正しい協力関係を糾明しなければならぬのである。西欧文明の近代性による軌道離脱をもどそうとしておくのが他でもない原点回帰であれば、もとの場にもどった西欧文明の適当な役割と機能を通して、健康な世界文明の創造という歴史的課業の成就のために、他の文明とともに健全な参与と貢献をなすことのできる道を求めることができるだろう。

そのために統一思想は、太平洋文明時代の思想的な主体となるために透徹した使命意識を基礎におき、自体の定立と改善向上をたえずつづけ、広い眼識の高い知恵と深い洞察を育んでゆかなければならぬだろう。

VI 結 論

太平洋文明時代は、太平洋文明圏から現われる思想と理念が世界史の主役となる時代である。太平洋文明圏が主軸となって世界文明をつくって展開してゆくのが、太平洋文明時代の歴史的な課題である。

このような性格と課題をもった太平洋文明時代において、統一思想のかかえている比較文明的な使命は、① 現代の世界と人類の前に文明の危機をもたらした近代西欧文明がもった病理のために、惹き起こさざるをえなかった神学的な危機と社会学的な危機と生態学的な危機と人間学的な危機を克服できる神学と社会学と生態学と人間学を定立・提示すること、② 正しい教育を通して育てられたエリートをして、太平洋文明時代の主役となるようにすること、③ はっきりとした未来社会の基本構想をもって、太平洋文明時代の社会哲学を導いてゆくこと、④ 健全な神学の基盤の上で、東洋思想の価値と意味を再照明することによって、世界文明に創造的に寄与する多彩な資料を発掘・提供すること、⑤ 近代文明の正当な座標設定を通して、

より健康な世界文明を創造するのに健全な寄与をすることのできる道を模索することである。

注

- (1) Jacques Elull, *Hope in Time of Abandonment*, translated by C. Edward Hopkin (New York: The Seabury Press, 1977) p. p. 1-37.
- (2) Geoffrey Barraclough, *An Introduction to Contemporary History* (Hammondswords, Middlesex: Penguin Books, 1964) p. 153.
- (3) loc. cit.
- (4) loc. cit.
- (5) Arnold Toynbee, *The World and the West* (London, Oxford Univ Press, 1953) p.p. 67-
- (6) loc. cit.
- (7) loc. cit.
- (8) M. Laserson, *The American Impact on Russia: 1784-1917* (New York: Harpers & Row, 1962) p. 270
- (9) R. W. Van Alstyne, *The Rising American Empire* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1960) p. 187.
- (10) A. C. Coolidge, *The United States as a World Power* (New York: Doubleday & Co, 1903) p. 325.